

その「突然」怖がる行動は本当に突然なのだろうか？

Lisa Desatnik

The Parrot that Fears PsittaScene excerpt Issue 28.1, Spring 2016 World Parrot Trust Publication

私は、インコ・オウム飼い主が、鳥たちの突然の神経質で・怖がっていると思えるような行動（ついでに言うと他のペットも同様に）に関する話を聞いたことがあります。明らかな理由もなく、自分たちの愛する鳥が、雄叫びをあげたり、突進してきたり、過去には良好な関係が築けていた手を避けようとしたりすると。

私が望んでいるのは、実際には上述の「怖がる」行動が突然起こるだけではないことを皆さんに理解してもらえるようにすることです。他とかかわりをもたない状態で、行動は起こりません。測定可能であり、観察可能な行動は、周囲の環境の前後関係の中で結果を得るための動物の手段です。言い換えれば、インコ・オウムが突然叫んだり、突進したり、これまでに何百回もステップアップしてきた手から逃げようとしたりした場合、何かが起こって、鳥との良好ではない関係を形成したに違いありません。

私は数年前に、この種の難問を追及することになった最初の実体験をしました。以前は、コイネズミヨウのバーナビーは、私の顔にバーナビーの顔を押し付けて一日中過ごしていたものですが（時々遊びを中断して）、彼が私の腕にステップアップした時、突然「パニック」になりました。バーナビーは、ゾッとするほどの雄叫びを上げ、激しく呼吸し、そして飛び立ってケージに戻りケージの奥の方に走っていきしました。理由もわからないまま、いきなり邪悪な怪物の役にさせられてしまったのは、胸が張り裂けそうでした。

それが起こるたびに、私は系統的脱感作法を経て、私の腕との良好な関係を再構築する手助けをしなければならませんでした。バーナビーは、行動に対して私から多くのポジティブレインフォースメント（正の強化）を受けた歴史があったので、私たちはかなり迅速に対応することができましたが、私が得た知識は、この状況がたまに起こるには理由がなければならないということを教えてくれました。

応用行動分析（ABA）は、問題行動を解決するための体系的なアプローチであり、非常に具体的な行動（咬みつきの雄叫びなど）と、そのきっかけや強化してしまうことになる関連する環境の事象も含みます。「全体の行動をおこす動作（Antecedent:先行事象）の*直前*に何が起こったのか？」そして、「それを強化する行動（結果）の*直後*に何が起こったのか？」について問います。

ABA の思考に切り替えて、私はそれらの「怖がる」ことを示す行動を取り巻くバーナビーの環境を評価するプロセスを開始しました。私が特定したものは、以下の通りです：

通りに面した鳥の部屋には窓があります。晴れた日に車が通り過ぎると、金属やガラスから反射した光が部屋の中の壁から壁へとはっきりと動いて見えます。私の隣人が特定の時間、特定の場所に車を駐車し、バーナビーがたまたま高いところにとまっていた場合、同じ邪悪な反射光が浮かんでいました。私の腕に飛び乗るたびに、同じ「引き金」となる通りからの光が現れることで、結局ただ怖いことが起こるという結果になっていました。

つまり、午後に私の腕に乗ることに対するバーナビーの怖がりや、結局のところ、青天の霹靂ではなかったのです！純粹に私のタイミングの悪さが根拠にあり、バーナビーの心の中では、私は窓の外から来る邪悪で恐ろしい光のすべてに関連しているように見えたのでしょう。

バーナビーは2種類の行動を示していました。1つは、明るい光に対する無意識の非自発的な反応（パニックの悲鳴、脱出）でした。科学用語では、これは無条件反射と呼ばれます。これは、バーナビーが、通常はいいことだけが続くことを学習してきたこととは違うからです。一方、彼のステップアップの行動は間違いなく学習したものです。科学者たちはこれをオペラント学習と言います。

では、クリッカー（強化される行動をマークするための小さな機械的な音を出すもの）の使用を考えてみてください。クリッカー自体は動物にとっては無意味なもの

です。優れたトレーナーが音とご褒美、つまり強化子を繰り返し関連付けた場合のみ、その動物にとっての価値を獲得することになります。そうすることで、クリック音は強化値を獲得することになります。

同じタイプの関連がバーナビーの中で起こっていましたが、それはただネガティブなものでした。私の腕に乗っていること（過去では、常に彼にポジティブレインフォースメント（正の強化）を用いて関連付けてきたこと）は、怖いことが起こることと関連付けがなされていました。「いい子」の言葉がサフラワーシードと関連付けられるようになったのと同じように、彼が私の腕に乗っていることは、恐ろしい光と関連付けられてしまいました。

分析が完了したことで、私の行動修正の解決はそれほど難しくはありませんでした。私は先行事象の見直し（私はこれを「防止」と考えるのが好きです）を行いました。私は一日の特定の時間にシェードをおろすことを忘れないように努めました。そして、それをすることができなかつたり、忘れてたりした日には、その時にバーナビーを腕にのせないようにしました。代わりに、バーナビーはその日のその時間にケージの中に入ることを学びました。

この小さな調整は、すぐに私の腕を嫌うようになった鳥と、私の肩にのってくれる仲であり続ける鳥との違いを意味しました。

生き物には、いつでも行動に影響を与える可能性のある環境問題、または健康問題のいずれかが常に存在することをいつも念頭に置いてください。それを分析することを体系的に分析することは、あなたとあなたの鳥にとって最も前向きで、最も押しつけがましくない解決策を思いつくことに役立つでしょう。

Translation : Yumiko Shibata

WPT: Learn > Reference Library > [The Parrot That Fears](#)